

附 章

第1節 漆紙文書について

一ノ坪遺跡出土漆紙文書

東京大学大学院 新井重行

一 概要

この漆紙文書は、平成12年度の調査でS K-160の覆土中より、須恵器坏の底部に付着した状態で出土した。須恵器は口縁部を欠損しており、口径は不明である。底径は6.0cmである。現状では、漆紙は固まった漆と一体となっており、漆紙だけを分離させることはできない。漆を含めた残存法量は長径8.4cm、短径5.9cmである。当文書は文書の廃棄後に、漆のパレットとして使用した土器の蓋紙として再利用されたものである。

二 漆紙文書について

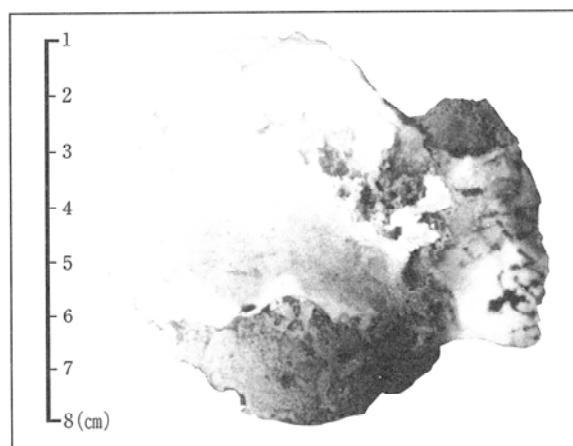
オモテ面中央部には土砂が付着している部分があり、この部分は赤外線カメラを使用しても文字は確認できなかった。また、オモテ面の一部に漆がみえる。これは、何らかの理由によって、上面から圧力が加わり（いつの時点かは不明）漆が蓋紙の上にまわり込んでしまったものと考えられる。

文字が確認できたのは右端のごく一部と左端の一部であるが（図版参照）文字の残りは悪く、判読はできなかった。文書の向きについては行が揃うということを考慮して、現段階では、図のように考えておく。すなわち、現状で確認できる文字は左文字であり、漆付着面に書かれている文字ということになる。

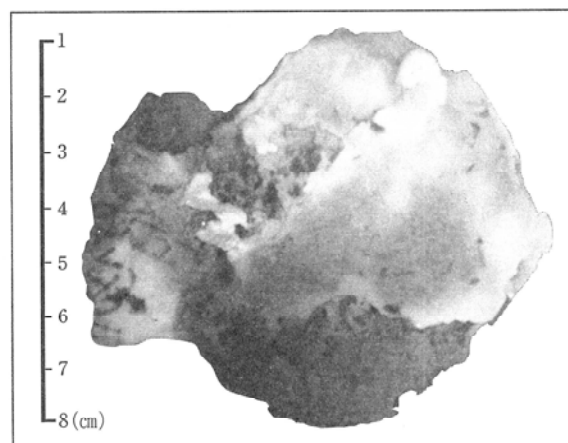
オモテ面については、水で濡らす等の方法で観察したが、文字は認められなかった。また、界線・合点等も確認できなかった。

三 釈文

二行分、合計四文字が確認されたが、それぞれの文字が一部を欠いており、判読するに至らなかった。文字の幅は約1.2cmである。行数・行幅は不明である。



正 位



裏 焼 き



正 位



裏 焼 き

(写真よりトレース)